

〈中学校 特別活動〉

多様な他者と協働し、自己のよさや可能性を生かして自己実現できる生徒の育成

— 自己有用感を育む学級活動の実践を通して —



浦添市立 港川中学校 根間 浩史



# 目次

<b>I</b>	<b>テーマ設定理由</b>	17
<b>II</b>	<b>目指す子ども像</b>	18
<b>III</b>	<b>研究の目標</b>	18
<b>IV</b>	<b>研究仮説</b>	18
1	基本仮説	18
2	作業仮説	18
<b>V</b>	<b>研究構想図</b>	18
<b>VI</b>	<b>研究内容</b>	19
1	自己有用感	19
2	事前から事後の一連の活動	20
3	自己実現	21
4	学級経営と生徒指導	22
<b>VII</b>	<b>授業実践</b>	23
1	検証の計画	23
2	検証授業第1回目	24
3	検証授業第2回目	25
<b>VIII</b>	<b>研究の考察</b>	26
1	作業仮説(1)の検証	26
2	作業仮説(2)の検証	28
3	本研究を通して	31
<b>IX</b>	<b>研究の成果と課題</b>	32
1	成果	32
2	課題	32
	おわりに	32
	主な参考・引用文献	32



## 多様な他者と協働し、自己のよさや可能性を生かして自己実現できる生徒の育成

### － 自己有用感を育む学級活動の実践を通して －

浦添市立港川中学校 根間 浩史

#### 【要約】

本研究は、学級活動の一連の活動や班活動等を多様な他者と協働することで、よりよい人間関係を形成し自己有用感を高め、自分のよさや可能性に気づき自己実現できる生徒の育成を目指すものである。

キーワード □自己有用感 □自己実現 □一連の活動 □振り返り □学級経営

#### I テーマ設定理由

グローバル化や情報化の進む複雑で変化の激しい社会において、次世代を担う子ども達には、将来、社会的・職業的に自立して生きるための「生きる力」を身に付けることが一層求められている。学校では、様々な情報や出来事を主体的に受け止め取捨選択し、多様な他者とかかわりながら、粘り強く考え課題を解決していくための力を生徒一人一人に身に付けられるようにすることが重要になると考えられる。

今回改訂された中学校学習指導要領解説では、総則編において、特別活動が学校教育全体を通して行うキャリア教育の要となることが示され、特別活動編においては、資質・能力の育成を目指すために、指導する上で重要な視点を「人間関係形成、社会参画、自己実現」の三つに整理された。また、学級活動(3)の内容がこれまでの「学業と進路」から「一人一人のキャリア形成と自己実現」として変更された。これは小学校から高等学校までの教育活動全体の中で「基礎的・汎用的能力」を育むというキャリア教育本来の役割を改めて明確にするためである。

さらに、「学級経営の充実」が総則編および特別活動編両方において示された。これは、他教科等で育成した資質・能力を特別活動で発展的に高め、特別活動の中核となる学級活動の実践で身に付けた力を他の教育活動における学びにつなげていくという往還が重視されているからである。このように、実践の積み重ねで身に付けた力を社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かし、よりよい生き方につなげていくことが求められている。

これまでの自身の実践を振り返ってみると、学級活動において、生徒が生活上の問題を見つけ、

その解決のために話し合い、実践することまでは行いが、その後、実践を振り返り、価値付けながら新たな課題を見だし、次の解決に向けて取り組むという一連の活動として実践することが出来なかった。それは、学級活動の実践のみが目的となってしまう、生徒にどのような力を身に付けさせたいのか教師自身が不明確であったからだと考えられる。また、学級経営においても、生徒のよさを引き出そうと活躍の場を設定してはいるものの、生徒が自信をもって行動したり、自分なりに考え、判断し、活動したりしながら自己のよさを生かすことが出来ず、自己の存在感を実感するまでには至らなかった。

学級経営の前提である生徒理解に基づく教師と生徒の信頼関係や、生徒同士の信頼関係を十分に構築するためにも、学級活動の充実を図り、一人一人の自己有用感を育むことは重要である。集団や他者との関わりを通して自己有用感を育むことは、自分のよさや可能性が認識され、主体的な学びの実現、今後の生活の改善が行われ、生徒が将来に向けて自分らしい生き方を実現するための自己実現を図ることに繋がると考える。

そこで本研究では、特別活動の中でも特に生徒にとって身近な学級活動を中核として、生徒一人一人が活躍できるような機会や互いに認め合う場を効果的に設定し、育てたい資質・能力を意識した振り返りから、新たな課題を見だし、解決へと向かう一連の活動の積み重ねを通して、自己有用感を育んでいきたい。そうすることで、個性や考え方がそれぞれ違う学級の多様な他者と協働し、自己のよさや可能性を生かして自己実現できる生徒の育成につながると考え、本テーマを設定した。

## II 目指す子ども像

- 1 自己や集団のよさや可能性を見だし、多様な他者と協働し、主体的に課題解決に向かって取り組む生徒
- 2 自分の成長や変容を自覚し、自己のよさや可能性を生かして、将来の生き方を考え行動することのできる生徒

## III 研究の目標

学級活動の一連の活動において、主体的に取り組むことができる活動を設定し、自己有用感を実感することのできる環境づくりの工夫をすることで、自己有用感を育み、自己のよさや可能性を生かして自己実現できる生徒の育成を目指す。

## IV 研究仮説

### 1 基本仮説

学級活動において、一連の活動を積み重ねることを通し、自己有用感を育むことのでき

る環境づくりを工夫することで、多様な他者と協働し自己のよさ可能性を生かして自己実現できる生徒を育成することができるであろう。

### 2 作業仮説

(1) 多様な他者と協働しながら実践する学級活動において、教師の価値付けや振り返りの場の設定、課題を見いだすための手立てを工夫することにより、自己や学校生活を捉え、新たな課題を見だし、次の課題解決に向けて主体的に取り組むだろう。

(2) 学級活動の一人一人が活躍できるような実践を振り返る場において、自己評価や相互評価、認め合いの場を設定することで、達成感を味わったり、他者の役に立つことのできる存在であることを実感し、自己有用感が生まれ、将来に向けて自分らしい生き方を考え行動できるであろう。

## V 研究構想図

### 《 目指す子ども像 》

- 1 自己や集団のよさや可能性を見だし、多様な他者と協働し、主体的に課題解決に向かって取り組む生徒
- 2 自分の成長や変容を自覚し、自己のよさや可能性を生かして、将来の生き方を考え行動することのできる生徒

### 《 研究テーマ 》

多様な他者と協働し、自己のよさや可能性を生かして自己実現できる生徒の育成  
— 自己有用感を育む学級活動の実践を通して —

### 《 研究の目標 》

学級活動の一連の活動において、主体的に取り組むことができる活動を設定し、自己有用感を実感することのできる環境づくりの工夫をすることで、自己有用感を育み、自己のよさや可能性を生かして自己実現できる生徒の育成を目指す。

### 《 研究仮説 》

#### 《 基本仮説 》

学級活動において、一連の活動を積み重ねることを通し、自己有用感を育むことのできる環境づくりを工夫することで、多様な他者と協働し、自己のよさや可能性を生かして自己実現できる生徒を育成することができるであろう。

#### 《 作業仮説 (1) 》

多様な他者と協働しながら実践する学級活動において、教師の価値付けや振り返りの場の設定、課題を見いだすための手立てを工夫することにより、自己や学校生活を捉え、新たな課題を見だし、次の課題解決に向けて主体的に取り組むだろう。

#### 《 作業仮説 (2) 》

学級活動の一人一人が活躍できるような実践を振り返る場において、自己評価や相互評価、認め合いの場を設定することで、達成感を味わったり、他者の役に立つことのできる存在であることを実感し、自己有用感が生まれ、将来に向けて自分らしい生き方を考え行動できるであろう。

### 《 研究内容 》

1. 自己有用感
2. 事前から事後の一連の活動
3. 自己実現
4. 学級経営と生徒指導

### 授業実践・評価

### 研究のまとめ・成果と課題

## VI 研究内容

### 1 自己有用感

#### (1) 自己有用感の構成要素

国立教育政策研究所「生徒指導リーフ (leaf18)」(2015)では、自己有用感とは「自分と他者（集団や社会）との関係を、自他ともに肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価」とある。

栃木総合教育センター（2013）（以降、栃木教育センター）によると、このような自己有用感は、主に「存在感」「承認」「貢献」の要素で構成されるという。「存在感」とは他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感である。「承認」とは他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況である。「貢献」とは他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況である。その中でも特に、「存在感」が「自己有用感」の中心的な構成要素であるという。また、「関係性」と名付けられる要素も「自己有用感」の獲得のために前提条件となるなどの重要なものであるという。

図1は、三つの要素と「関係性」との関連の強さを、矢印の大きさを模式的に示したものである。

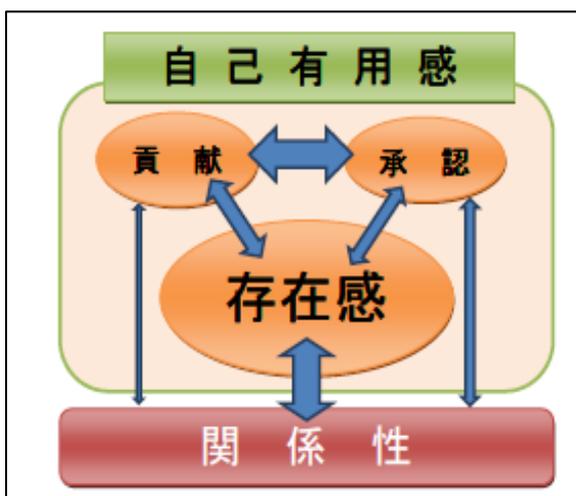


図1 自己有用感を構成する三つの要素と「関係性」（栃木県総合教育センターの図を参照）

つまり、生徒が、良好な人間関係である

他者や集団のために、役に立つことを行い「貢献」する。その後、他者や集団から「承認」されると、「存在感」が高まる。その過程と同時に、「自己有用感」と「関係性」は共に高まっていく（図2）。

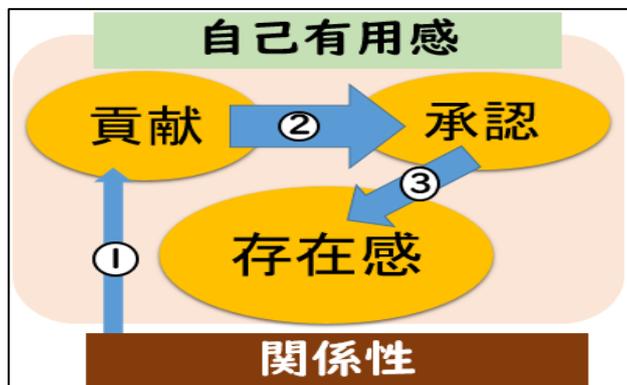


図2 「貢献」したことから「承認」され「存在感」が高まる過程

あるいは、生徒が、「存在感」を実感していると、他者や集団に「貢献」したいという意欲につながり、「貢献」する。そうして、他者や集団に「承認」され、自己有用感も高まっていく（図3）。

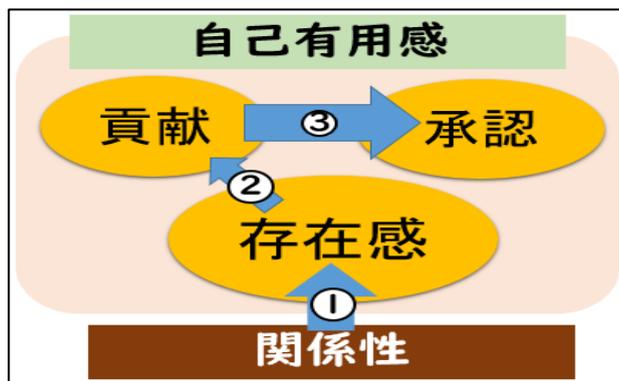


図3 「存在感」から「貢献」し「承認」される過程

このように、「自己有用感」は、構成する主要要素の「存在感」「承認」「貢献」が相互に関連し合って高まっていくものと考えられる。「関係性」については、自己有用感の構成要素ではないものの、自己有用感の獲得において重要と考えられ、自己有用感を支える土台のようなイメージで捉えることとしている。

#### (2) 自己有用感が高い児童生徒の特徴と自己有用感を高める教育的環境

栃木教育センター（2013）によると、自己有用感の高い児童生徒は、自信をもち、

集団の中で他者と協働しながら主体的に生活している傾向にあるという。つまり、自己有用感と望ましい意識や行動には、強い関連があるということである。自己有用感の高い生徒の具体的な姿としては、「自尊心が高く、自信がある」「他者に対して思いやりのある行動ができる」「他者と協働できる」「学習への意欲が高く、自主的・自律的な生活ができていいる」などが挙げられる。このような望ましい姿を育み伸ばしていくために、教師は「児童生徒をよく観察し、本人が褒めて欲しいと思っていることを褒める」、「教師の方から積極的に、児童生徒に話し掛ける」、「児童生徒が話を聞いてほしいと思うときに、児童生徒の話を聞く」、「授業の中で、クラスの人同士がよいところを認め合う場を多く設定する」といった働きかけや環境づくりを意識的に行う必要がある。

本研究では、自己有用感の構成要素の中でも特に存在感の高まりに着目しながら、特別活動の三つの視点である「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」のうちの「人間関係形成」に焦点をあてて学級活動の実践を積み重ねていく。

存在感を高められるよう、一人一人の役割を設定し、お互いに協力し合い、認め合う雰囲気づくりにつなげ、よりよい人間関係づくりに努める。そして、自己有用感を高め、自分の可能性を感じ、よさを生かして自己実現できるような生徒の育成を図っていく。

## 2 事前から事後の一連の活動

### (1) 事前から事後の一連の活動について

中学校学習指導要領解説特別活動編(2018)(以降、解説特活編)では、特別活動における資質・能力を育成するには、自発的、自治的な学級や学校の生活づくりを実感できるような一連の活動を意識して指導

に当たる必要があると示されている(図4)。

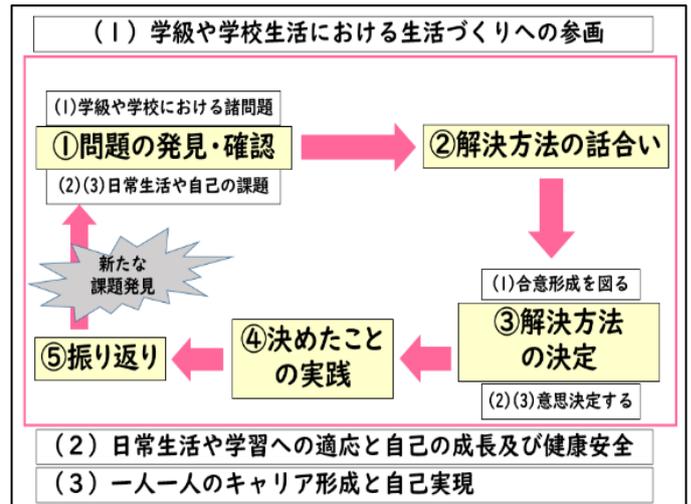


図4 学級活動(1)(2)(3)の学習過程

また、福田(2019)は、「特別活動には『自己肯定感』や『自己有用感』を高める場が多様にあり、学級活動の一連の活動もその一つ」と言っている。

そこで、本研究では学級活動における一連の活動を通して、生徒の自己有用感を高め、自己実現を図る。社会や集団の形成者としての見方・考え方を働かせ、生活上の問題に気づき、問題の解決に向けた見通しをもち、集団討議、集団思考を通して、具体的な実践方法について合意形成を図ったり、意思決定をしたりするのである。

このような自主的、実践的な活動を積み重ね、自らの役割を果たし、目標に迫っていく学習過程を繰り返す中で、生徒同士の認め合いや支え合いが生まれていくと考える。

育てたい資質・能力を意識した教師の働きかけや環境づくりを工夫し、生徒一人一人が実践について自己評価、相互評価で振り返りを行い、達成感、存在感を味わい、自己理解をし、また新たな課題の発見へとつながる。

この一連の活動を通して、生徒は多様な他者との関わりの中で、自分を見つめ直すことができ、自らの成長に気付くことができる。そして、さらなる自己の成長を目指す

したいと思う自己実現ができると思う。

## (2) 振り返りについて

本研究では、振り返りの場を重視していきたい。国立教育政策研究所(2019)は、「生徒自身の行動や考え方、人間関係の変化等様々な意識の変化について、活動後に振り返ることが必要であり、このような成長への感覚が自己肯定感へとつながり、新たな行動目標が生まれる」と示している。

また、現在「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」(2020)では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて日々の学びの質を高める授業改善の取り組みを日常化するために3つの視点を掲げている。その中の視点2に「学び・育ちの実感」の具体的な手立ての一つとして「振り返り」の大切さを挙げており、振り返りの場において、自己評価や相互評価などで自分の成長や努力の過程を認識するとともに、それを言語化し、アウトプットさせることが大事だとしている。

本研究における振り返りの工夫として、育成を目指す資質・能力の視点である「人間関係形成」を振り返られるよう工夫する。そうすることで、生徒が活動によって身に付けた力や成長をより自覚し、存在感を高めるための新たな活動の動機となると考えられる。

また、教師の価値付けや、自己評価、相互評価の組み合わせを取り入れ、ただ単に自他の行動のよしあしを評価するだけでなく、他者の評価から原因と結果を結び付け、学習過程を振り返られるようにしたい。そうすることで、気付かなかった自分の良さに気付いたり、新たな課題を発見したりして次の目標に向かって行動できると考える。

## 3 自己実現

### (1) 自己実現とは

解説特活編(2018)では、自己実現は「集

団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする視点である。」と示している。

本研究では、多様な他者と協働しながら現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよく改善しようとする生徒を育てるため、自己実現を「集団の中で、自己の理解を深め、現在及び将来に関わる課題を解決しようとする」とする。

### (2) 自己実現に向かうために

川瀬(2002)は、マズローの主張について、「人間の欲求を、生理的欲求、安全欲求、所属と愛情の欲求(社会的欲求)、承認の欲求、自己実現の欲求という五つの欲求に分類し階層化した欲求階層論」として紹介している。この欲求階層論には、欲求の段階が低次であればあるほど、その欲求を強く満たそうとし、低い欲求がある程度満たされれば、さらにその上の高次の欲求が出現するという特徴があるという。

「自己実現」の欲求は通常、生理的欲求、安全欲求、社会的欲求、承認の欲求といった欲求が先だつて満足された場合に出現することから、「自己実現」を図るために、まずは自分たちの規律があり、助け合い、認め合いのある、よりよい人間関係づくりに力を入れるべきだと考えられる。

また、稲垣(2020)は、自己実現には内発的動機付けが必要と言っている。自己実現を図るには、報酬や罰に基づく動機づけではなく、自分は何を学びたいのか、社会のために何がしたいのかなどの心の声を生徒自身が聞き取り、ありのままの自己を受け入れる必要があると考えられる。

本研究では、支持的風土のある安心・安全な学級をつくっていくため、生徒がお互いに協働し所属意識を持ち、承認の欲求がある程度満たされながら自己有用感を高め、各活動の振り返りから自己を見つめ受け入れ、自己実現を図れるようにしたい。

#### 4 学級経営と生徒指導

自己有用感を高め、自己実現に向かう生徒を育成するには、お互いが認め合い、協働する環境が欠かせない。本研究では支持的風土のある学級づくりに努める。

解説特活編（2018）では、「教師と生徒、生徒相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図ること。その際、特にいじめの未然防止等を含めた生徒指導との関連を図るようにすること」と示されている。

学級を中心として生徒の生活が営まれ、生徒の成長発達が進められるので、学級という学校生活の場は、生徒指導を進める上でも基礎となる生活場面だと言える。

文部科学省は生徒指導提要(2000)の中で、生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」と述べている。教師は単なる問題行動への対応という消極的な面だけにとどまるのではなく、社会的資質・能力を伸ばすとともに、それらを適切に行使して自己実現を図り、成長・発達を支援していくという積極的な働きかけをしなければならない。

また、中学校学習指導要領解説総則編(2018)に、「各学校においては、生徒指導が、一人一人の生徒の健全な成長を促し、生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」と示されている。岩手県立総合教育センター（2007）によると、自己指導能力とは「その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行する能力」であり、自己指導能力の育成を図るために、以下の生徒指導の三つの機能を作用させることが大切であるとされている（表1）。

表 1 自己指導能力を育成するための、生徒指導の三つの機能（岩手県総合教育センターの表を参照）

1. 児童生徒に自己存在感を与える
2. 児童生徒に自己決定の場を与える
3. 児童生徒との共感的な人間関係を育てる

深い生徒理解の下、生徒指導の機能を十分に発揮し、集団への所属感、共感的な人間関係、自己存在感、自己決定の場面や自己実現の喜びを味わえるよう、自己指導能力や自己実現のための態度や能力の育成を図ることが、支持的風土のある学級づくりにつながっていくと考える。

本研究では、一連の活動において、学級会の司会グループ輪番制（自己存在感）を取り入れたり、課題解決に向けて役割を生徒自ら決め（意思決定）協働したりしながら実践し、共感的な人間関係を育み、支持的風土のある学級づくりに努める。

最後に研究内容 1 から 4 の内容を踏まえ、生徒の自己実現を図る構想をマズローの欲求階級論をもとに図に表す（図 5）。

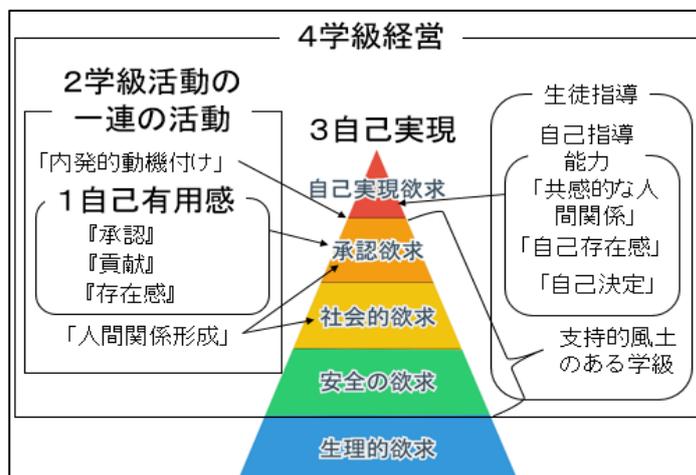


図5 本研究の自己実現を図る構想図

本研究では、集団の中で協働し、それぞれの要素や力を生徒が実感したり、身につけたりして、段階的に自分に満足し、自己のよさや可能性を生かそうとする生徒を育成できるようにしたい。

## VIII 授業実践

### 1 検証の計画

	日程	生徒の活動	指導上の留意点	◎目指す生徒の姿 【観点】〈評価方法〉	
学級活動(1)ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決	実践1 議題 「忘れられない思い出となる動画作成プロジェクト」				
	事前	11/30 放課後	○クラスの課題とその改善策の話合い (級長, 副級長, 計画委員)	・学級の課題となる原因を挙げ, 解決には何が必要かを考えさせる。	
		12/7 学級活動	○学級会の議題を確認する。	・選定した議題について全員に知らせて承認を得る。	◎議題の意義を確認し, 課題解決に向けてこれからみんなで協働して実践していくことを理解する。 【知識・技能】〈観察〉
		12/8 放課後	○全員の学級会ノートを確認して話合いの準備や仕事内容の確認をする。(計画委員)	・学級会の進行がうまくいくように, 話合いの流れを確認する。	
	本時	12/10 学級活動	○一人一人の思いや願いを大切にしながら, 多様な意見を取り入れ話し合い, 合意形成を図る。	・「男女仲良く」「一人一人に役割がある」「みんなの良さを生かせる」の3つの視点をもとに合意形成を図る。	◎異なる意見から共通点を見いだし, 合意形成に向け取り組んでいる。 【思考・判断・表現】 〈学級会ノート・観察〉
	事後	12/16 ～ 12/18 放課後	○グループに分かれて, 計画書を作成する。 ○役割分担し自分の役割を確認する。 ○動画作成に取りかかる。	・それぞれの長所を生かし役割を決めるようにする ・協力し, 支え合いながら作業に取りかかるようにする。	
12/21 学級活動		○作成した動画を皆で鑑賞する。 ○作成終了までの過程を振り返る。	・皆で協働したこと, 作成までの過程で得たもの, 自分が成長したところを認識し, それを次に生かすようにする。	◎自分が成長したところを認識し, それを次に生かそうとする。 【主体的態度】 〈観察・振り返りシート〉	
択学と級将来設計(3)ウ 主体的な進路の選	実践2 題材 「人生に夢をもとう」				
	事前	12/25 学級活動	○今までの学級活動で身につけた力を意識しながら, 4人グループで「ジョハリの窓」を行い, 客観的に見た自分を知り, 自己理解を深める。	・一人一人が発見したそれぞれの新しい自分の姿を尊重すると共に一見短所に思えることも努力次第で長所が変わるということ理解できるようにする。	◎他者の意見を受け入れ, 自分を見つめ直し, 自己理解しようとしている。 【主体的態度】 〈振り返りシート, 観察〉
1/8 総合的な学習の時間		○身近な人に, 仕事内容や働く意義をインタビューしてきたことをグループで共有, 整理, 分析する。	・それぞれの職業の共通点や相違点を視点に仕事内容や働く意義をまとめる中で, 働くことに対する価値観を広げることができるようになる。		

学級活動(3) ウ 主体的な進路の選択と将来設計	事前	1/8 総合的な学習の時間	○目指している、または、興味のある職業に就くまでの道のりを図式化したり、必要な資格や仕事内容等を調べたりする。	・職業に関する情報を収集し、将来の進路の見通しをもつことができるようにする。	
	本時	1/12 学級活動	○自分の将来の夢を思い描き、その夢の実現のために何を実践するかを意思決定し、それを実行する意欲を高める。	・今日の学習で学んだことが、将来の夢や目標の実現につながることを理解し、将来の進路の見通しがより明確になるようにする。	◎自分の興味・関心や適性から将来の夢や結びつく職業を考え、その夢の実現のために必要なことを意思決定している。 【思考・判断・表現】 〈ワークシート、観察〉
	事後	1/18 帰りの会	○前回の授業で、夢や目標に向かって、これから挑戦していきたいことを実際に行っているか、または計画を立てているか、自分の行動が変わったところを振り返る。	・進路決定を急ぐことなく、将来を描き直したり、夢や目標を修正したりして、自己実現に向けて努力していく姿勢や態度が重要であることを理解できるようにする。	◎夢の実現に向けて努力している。または、行動が良い方向に変わった。 【主体的態度】 〈振り返りシート〉

## 2 検証授業 第1回目(実施日2020年12月10日)

### (1) 議題「忘れられない思い出となる動画作成プロジェクト」

学級活動(1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

### (2) 本議題のねらい

一人一人の思いや願いを大切にしながら、多様な意見を取り入れ話し合い、合意形成を図る。

### (3) 授業の概要

話し合いの順序	指導上の留意点	◎目指す生徒の姿 【観点】〈評価方法〉
1 はじめの言葉 2 司会グループの紹介 3 議題の確認 4 提案理由やめあて、条件の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・めあてをもって自分の役割に臨むことができるようにした。</li> <li>・提案者の思いや願いを全員が理解し、学級全員の問題であることを確認した。</li> </ul>	
条件 <ul style="list-style-type: none"> <li>・予算なし</li> <li>・学校内で撮影する。</li> <li>・12/21(月)5校時に上映会</li> <li>・上映時間は30分</li> </ul>	めあて 一人一人の思いや願いを大切にしながら、合意形成を図る。	
5 教師の話	<ul style="list-style-type: none"> <li>・提案理由や条件を確認して、クラスの課題が自分事と捉えさせ、話し合いへの意欲付けを図った。</li> </ul>	
6 話し合い (1) 話し合うこと① 「動画の内容を考えよう」(図6)  (2) 話し合うこと② 「役割を決め、分担しよう」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「男女仲良く」、「一人一人に役割がある」、「みんなの良さを生かせる」の三つの視点をもとに話し合いを行った。</li> <li>・必要に応じて、自分の意見に固執せず納得した上で考えを変えるなど、折り合いをつけて合意形成を図ることの大切さについて助言した。</li> </ul> 	◎異なる意見から共通点を見だし、合意形成に向け取り組んでいる。 【思考・判断・表現】 〈学級会ノート・観察〉

図6 視点を満たしていれば黒板にカードを貼る

7 決まったことの発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決まったことを確認し、実践意欲を高めた。</li> <li>・話し合いを通して新たに気付いたことや友達のよさや自分の頑張ったことについて振り返ることが出来るように助言した。</li> <li>・計画委員の頑張りをみんなで認めた。</li> <li>・実践への見通しを持たせ、事後の活動への意欲が高まるように、生徒の頑張りを価値付けた。</li> </ul>	
8 話し合いの振り返り		
9 先生の話		
10 おわりの言葉		

### 3 検証授業 第2回目 (実施日 2021年1月12日)

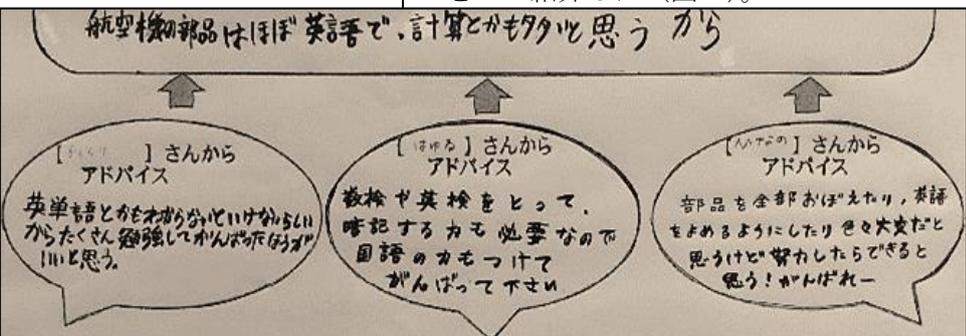
#### (1) 題材「人生に夢をもとう」

学級活動(3) ウ 主体的な進路の選択と将来設計

#### (2) 本題材のねらい

自分の将来の夢を思い描き、その夢の実現のために何を実践するかを意思決定し、それを実行する意欲を高める。

#### (3) 授業の概要

	生徒の活動	指導上の留意点	◎目指す生徒の姿 【観点】〈評価方法〉
導入 つか む	1 事前アンケートの結果を共有した。 2 めあての確認	・夢を実現させるために何が必要なのかという課題を共通確認した。	
		めあて 将来の夢や目標の実現のために挑戦したいことを意思決定する。	
展開 さ ぐ る (10分)	3 自分の夢をかなえるために必要な4つの力がより強くなるためには、どのようなことが必要かを考える。 ・「自分を知る」について ・「挑戦する」ことについて ・「協力する」ことについて ・「選択する」ことについて	・自分の長所と短所の両方を知ることの大切を理解し、可能性を知る。 ・計画を立てて実行し、振り返る。 ・家族や身の回りの人の協力も重要であることを理解できるようにする。 ・進路や情報、行動を選択することが、職業の選択や夢の実現につながることを理解できるようにする。	
展開 み つ け る (15分)	4 夢や目標にむかって、これから挑戦していきたいことを考える。 5 グループの人からのアドバイスを参考に、挑戦していきたいことを再検討する(図7)。	・夢の実現のためには、進路を決定する必要がある、そのために努力することが大切であることを伝えた。 ・訂正する場合は、改善点を確認できるような色ペンなどを使い、書き加えるよう指示した。	
展開 き め る (5分)	6 話し合った内容を踏まえ意思決定し全体で共有する。	・話し合った内容の中から参考になるものを3つ紹介した(図8)。	◎自分の興味・関心や適性から将来の夢や結びつく職業を考え、その夢の実現のために必要なことを意思決定している。 【思考・判断・表現】 〈ワークシート、観察〉
			
	図8 アドバイスをもらった後の生徒のワークシート		
終末 (15分)	7 振り返る。 8 先生の話聞く。	・今日の学習で学んだことが、将来の夢や目標の実現につながることを理解し、将来の進路の見通しがより明確になるようにした。	◎夢の実現に向けて必要なことを実践する意欲を高めている。【主体的態度】 〈ワークシート、観察〉

## VIII 研究の考察

本研究では【実践1】学級活動(1)「忘れられない思い出となる動画作成プロジェクト」、【実践2】学級活動(3)「人生に夢をもとう」の2つの実践を行った。ここでは2つの実践のつながりを踏まえて、具体的な手立てとその結果及び考察を中心に述べる。

### 1 作業仮説(1)の検証

多様な他者と協働しながら実践する学級活動において、教師の価値付けや振り返りの場の設定、課題を見いだすための手だてを工夫することにより、自己や学校生活を捉え、新たな課題を見だし、次の課題解決に向けて主体的に取り組むだろう。

#### (1) 多様な他者と協働し実践する

##### ① 手だて

【実践1】「忘れられない思い出となる動画作成プロジェクト」において、多様な他者と協働できるよう、一連の活動を通して、目指す資質能力の三つの視点を意識し課題解決に取り組んだ。

##### ② 結果

事前の活動では、計画委員が合唱コンクールの振り返り、クラスの現状から、男女の人間関係に課題があることを伝え、ただ動画作成を楽しむだけではなく課題解決につなげることを共通確認した。その際、教師が三つの視点を意識した取り組みにしよう伝えた。今回は特に「人間関係形成」の視点を意識した。

学級会において、話し合いに入る前の事前調査では、「君の名は(話題になっている映画の再現)」にほとんどの生徒の票が集まったが、話し合いを進めていくうちに、視点を入れた意見を述べたり、視点を満たしているかを考えたりして、話し合いが活性化した。

作成する動画は、①「怖い話」、②「バカッコイイ(施行回数をこなし、みんなで奇跡の瞬間を動画におさめる取り組み)」に決まり、どの内容も互いに協力することや、みんなが参加できることが考えられた取り

組みになっていると感じられた。今回は合意形成ではなく、賛成意見が多い案が通る結果となったが、今後の研究において、合意形成を図るための手順、方法をしっかり示し、話し合いの経験を積み重ねていきたい。

実践では、学級会では気付かなかった役割として、監督、ナレーション係が必要だと分かり、率先して引き受ける生徒の姿や、出演者が打ち合わせをする姿が見られた。動画編集では、パソコンに詳しい生徒が友達に教えていたり、撮影した内容をどう編集したら伝わりやすいかを話し合ったりしている場面が見られ、協働したり、主体的に活動する生徒が多く見られた。

事後の活動では、特に「人間関係形成」の視点をふまえて振り返り、「みんなで協力して動画を作ることができてよかったです。」や「動画を作成、撮影して人間関係(男女)が仲良くなれた気がする。」など協力できたことや仲良くなれたことに関する記述が多く見られた。

意識調査の結果から、協力して実践する生徒が増えたことが分かる(図9)。

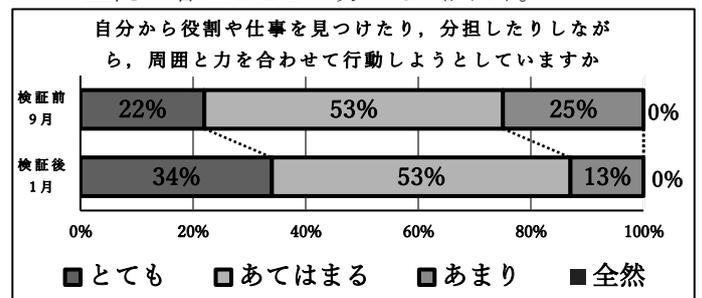


図9 主体的に協力することに関する意識調査

##### ③ 考察

事前から、クラスの現状を伝え、男女の人間関係に課題があることを共通認識として、解決する意識を持つことで、人間関係形成を意識しながら、一連の活動を実践することができたと考える。また、教師ではなく、計画委員が課題を提案することにより、生徒がクラスの課題を自分事として捉え、所属意識や協調性が高まったと考える。

学級会では視点を入れた意見が多く挙げ

られ、話し合いが活発に行われた（表2）。

表2【実践1】の視点を意識した話し合い

S1：バカッコイイがいいと思います。なぜなら、一人一人に役割があるからです。	社会参画の視点
S2：バカッコイイってなんですか。 (中略)	
S3：バカッコイイに賛成です。男女仲良く楽しめるからです。	人間関係形成の視点
S2：バカッコイイは出来なかったら大変なので反対です。	
S4：バカッコイイに賛成です。なぜならすごワザ動画なら簡単にできないので、男女仲良くできて楽しみながら作成できるからです。 (中略)	新たな視点
S5：バカッコイイに賛成です。みんなで協力して全部できたら達成感が得られるからです。	
S2：バカッコイイは1つだけ作るのですか。 S1：いっぱい作ります。グループを作ってみんなで作ります。	

表2を分析すると、初めにS1が「なぜなら、一人一人に役割があるからです。」と社会参画の視点を踏まえ提案している。これは事前学習で、三つの視点を意識して活動することを理解し、クラスの課題を自分事として捉え、解決を意識して発言したと考える。

またS4は、人間関係形成の視点もあることを言及し、S5は「達成感」という新たな視点を発見した。これは、友達の見方を尊重し、よさを見いだそうとしていることが考えられる。

学級会に三つの視点を入れると、一人一人が真剣に考え、目的を持った活発な話し合いになり、実践でも身につける力を意識した取り組みにつながる事が考えられる。

事後では三つ視点をもとに活動できたかについて振り返ることで、他者や自己とのかわりを幅広く考え、自身の成長や変容に気付く記述が多く見られた（表3）。

表3【実践1】の事後における生徒の振り返り

人間関係形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・編集も遅くまで居残りをしてみんなで声をかけながら良い作品を作成できたので良かったです。これからも6組でいろんなことをやっていいクラスにしたいです。</li> <li>・みんなそれぞれのグループで団結できていた。</li> <li>・失敗しても責めないであきらめないで最後までやり遂げた。</li> </ul>
社会参画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなと同じ事をやるのがいい経験になった。今後もみんなと協力できそう。</li> <li>・みんなと話し合っって計画をもう少ししっかり立てた方が良かった。</li> </ul>

自己実現	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコンの仕組みが少しわかって、今度は高校の文化祭に生かせそう。</li> <li>・役割とか決めて活動する力が身についたと思う。</li> </ul>
------	--

(2) 教師の価値付けや振り返りの場の設定、課題を見いだすための手だての工夫

① 手だて

これまでに、全7回学級会を行っており、振り返りの際は、クラスの良いところと課題、解決策を書き、次の課題解決につなげることができるようにした。

また、友達の活躍したエピソードを生徒から募集し、その後、学級通信に載せ、教師のコメントも添え配布したり、学級掲示で「みんなの気付き」として掲示したりし、存在感や、自己有用感を実感し、次の課題へと取り組む意欲を高めた。

② 結果

学級会では、事前にクラスの状況を考えて、提案理由に学級の課題を入れたりすることで、課題解決を意識した話し合い活動になった。振り返りシートには毎回、新たな課題を見だし、学級を良くしようとする考えが見られた。

意識調査の結果から、クラスのことを考え、課題解決に取り組んでいる生徒が増えていることが読み取れる（図10）。

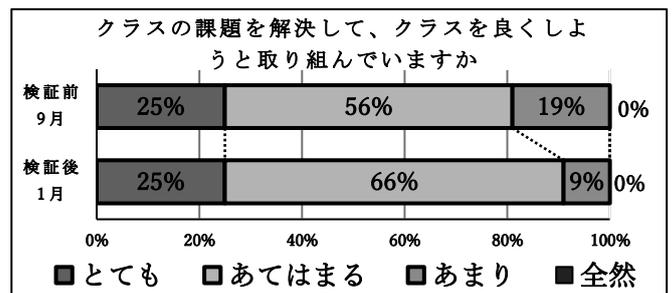


図10 クラスの課題解決に関する意識調査

③ 考察

一連の活動の振り返りで、クラスの現状や課題の原因、解決に有効な手段を見いだすことを積み重ねることで、解決する態度が身につけてきたと考える。

また、学級通信や「みんなの気付き」で他者から承認されることで、自信を持ち、更に他者の役に立とうとする気持ちが高ま

り、新たな課題解決に向けて取り組む生徒が増えたと考える。

## 2 作業仮説(2)の検証

学級活動の一人一人が活躍できるような実践を振り返る場において、自己評価や相互評価、認め合いの場を設定することで、達成感を味わったり、他者の役に立つことのできる存在であることを実感し、自己有用感が生まれ、将来に向けて自分らしい生き方を考え行動できるであろう。

### (1) 一人一人が活躍できるようにする

#### ① 手だて

一人一人が活躍できるように、安心して活動できる場を設定することが必要である。生徒指導の三つの機能（自己存在感、自己決定、共感的な人間関係）を取り入れ、学級の支持的風土づくりを意識し、自己有用感を育てていけるようにしたい。そのため、学級会の司会グループを輪番制で担当し、事前の打ち合わせや本時の進行等を経験し、自己存在感を実感する機会を設定した。

【実践1】の学級会では「社会参画」の視点を入れ、一人一人が活躍できる取り組みになるよう話し合いを行い、役割を自己決定できるようにした。

自己有用感を構成する主要素の「存在感」、「承認」、「貢献」の高まる過程をもとに、一人一人が担当する役割で貢献したことを事後の活動や振り返りで承認し合う共感的な人間関係を育む場を設定し、存在感を高め、自己有用感の実感につなげた。

#### ② 結果

【実践1】では、あらかじめ計画委員会と必要な役割を確認した後、学級会でも役割を皆から引き出し、担当を決めた。また、生徒自ら休み時間や放課後を利用して1週間調整を行い割り振った結果、男女が混合した割り振りになり、一人一人が役割を意思決定した。

実践では、監督係が指示を出したり、ナレーション係がタイミングを測って語った

り、出演者がそれぞれの演技、道具係がそれぞれの道具を配置、撮影係がタブレットで撮影した動画を編集係に引き渡して、再び撮影する等、生徒一人一人が活躍する姿が見られた。生徒の感想に「それぞれの役割を一生懸命果たした。」「みんなに役割があってみんな協力していた。」「何回もやり直しをして成功させたときの達成感が味わえて嬉しかった。」「時間をかけて一生懸命できたのですが、上映会まで終わって疲れが出ました。ナレーションといういい仕事ができるとてもうれしかったし楽しかったです。」という記述があり、自分の役割に責任を持って成し遂げたことが読み取れる。

#### ③ 考察

動画作成でそれぞれが自分の役割を果たし、クラスに貢献できたという気持ちが生まれ、振り返りでは、グループで承認し合うことで、共感的な人間関係が生まれ、存在感が高まったと考えられる。その過程で役に立ったという実感や今後も必要とされたいという気持ちが生まれ、生徒の自己有用感が高まったと考える。

栃木県立総合教育センターが開発した「自己有用感尺度(質問紙)と分析ツール」(2013)を使用した調査結果から、生徒のクラスに対する三つの要素と自己有用感の平均値が上がっている(図11)。

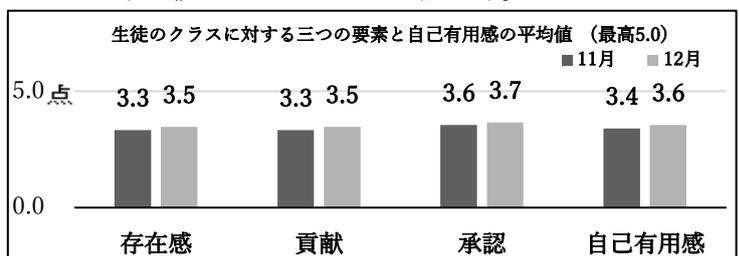


図11 三つの要素と自己有用感に関する調査

このツールは、普段思っていることの質問を30問回答し、三つの要素と自己有用感をどの程度感じているかを数値で表すものである。1つの質問に「とてもあてはまる」の5点から、「まったくあてはまらない」の1点までの5段階で回答し、質問には「存

在感」,「貢献」,「承認」,「自己有用感」のそれぞれに関するものがあり,各要素の質問の平均点が,その要素の数値となる。

動画作成後の上映会においては,監督,動画撮影,ナレーションの役割を果たした3名が,上映会の司会を自ら計画し率先して行う姿が見られた(図12)。



図12 上映会の様子

これは,実践で出演者の演技や声の大きさ,立ち位置を指示したり,感情を込めて原稿を読んだりするなど,率先して動画作成に関わったことで,存在感を実感し,貢献したいという意欲につながったと考えられ,自己有用感が更に高まった姿だと思われる。

ここで,行動変容が大きかった生徒Aと生徒Bを取り上げる。生徒Aはこれまで,清掃活動や班活動には消極的で,学級会で発言をしなかったが,【実践1】の学級会では,社会参画の視点を踏まえた理由も添えて「バカッコイイ」というタイトルの動画作成を提案した。話し合いの結果,提案が通り実践でも率先してみんなを指示する姿が見られた。調査結果からは,生徒Aのクラスに対する存在感と自己有用感の数値が上がっていることが読み取れる(図13)。

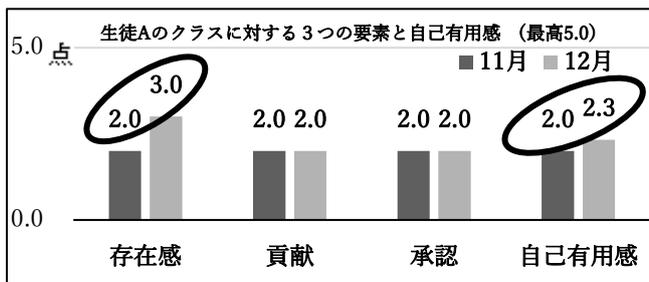


図13 生徒Aを対象とした三つの要素と自己有用感に関する調査

生徒Aの振り返りシートには「自分の役割を成し遂げることができた。」と書かれて

おり,今まで,学級活動に消極的であった生徒Aが実践を通して,自分の役割果たすことで,自信を持ち,他の授業でも発表する姿が見られるようになった。これは,学級会で提案したものが通ったことで,存在感が高まり,自己有用感が育まれ,その後の実践や学校生活でも役に立ちたいという気持ちが現れ,積極的に活動するようになったと考える。

生徒Bは内気な子であり,今まで率先して活動する姿が見られなかったが,司会グループでは板書を担当し,事前準備では板書計画をメモしたり,シミュレーションを何回も行ったりして,本番では滞ることなく役割を果たした。

今まで,ボランティア等を率先して引き受ける生徒ではなかったが,実践では動画編集係を引き受け,最後まで責任をもって仕上げた。振り返りでは「学級会の司会グループも撮影,編集,ほとんどが初めてだったけど,先生やみんなが教えてくれたり,手伝ってくれたりして,放課後,土曜日も部活の後にもやって完成したので,とてもうれしいです。またこういう機会があったらやってみたいです。」と記述していた。

しかし,調査結果では生徒Bの教師に対する存在感と承認,自己有用感の数値は上がっているが,クラスに対する存在感と自己有用感の数値が下がっている(図14)。

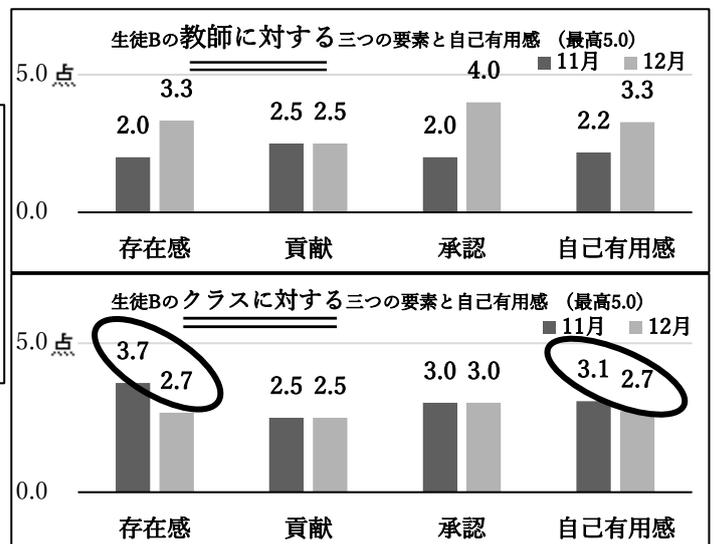


図14 生徒Bを対象とした三つの要素と自己有用感に関する調査

これは、学級会の打ち合わせや動画編集での意見のやり取りで、教師との関わりがとても多かったものの、他の生徒との会話があまりなく、皆に提案したいことがあっても、気が引けて言えなかったからだと思われる。教師は生徒Bから提案を聞き、それを皆に反映させ、協働を促すべきであった。また、比較的注目を浴びた出演者が多く承認されたことにより、自分で成し遂げた編集は皆に貢献できたと実感していなかったと考える。目立たないが貢献した生徒をクラスの皆に気付くきっかけをつくったり、教師がそういう生徒をもっと価値付けるべきだったと考えられる。ただ、与えられた役割をきっかけに、実践を通して一生懸命クラスのために活動するようになったことは大きな成果であり、目指す生徒像とは違ったが、そのような変容が現れた過程は、今後の研究の参考にしていきたい。

(2) 自己評価や相互評価、認め合いの場の設定

① 手だて

【実践1】の一連の活動の振り返りで、自己評価と相互評価を組み合わせた。その際、相互評価では友達の良かったところを見つけ伝える活動を入れた。その後、【実践2】の授業で生徒の自己実現を図った。

② 結果

【実践1】の事後の相互評価において、友達の良かったところを見つけ伝える活動を入れることで、自分や互いのよさに気付いたり、お互いの頑張りを共有した。「毎回積極的に参加してくれたからありがたいと思った。」「演技が上手で笑い方も工夫していてすごい。」「編集がものすごく良かった。もう一度Cさんの編集した動画が見たい。」などの労いや長所を褒めるコメントや、「輪に入れなかった次は協力して取り組めるよう頑張ろう。」など課題を指摘して励ましの言葉をかける様子も見られた。

その後、自己有用感が高まった状態から、

自己理解、職業に関する事前学習を行い、

【実践2】に入った。導入で、今までの学級活動を振り返り、身につけた力を意識して、夢や目標に向かって挑戦したいことを意思決定した。

調査結果から、自分の可能性を感じ、良さを生かそうとする生徒が増えたことが分かる(図15)。

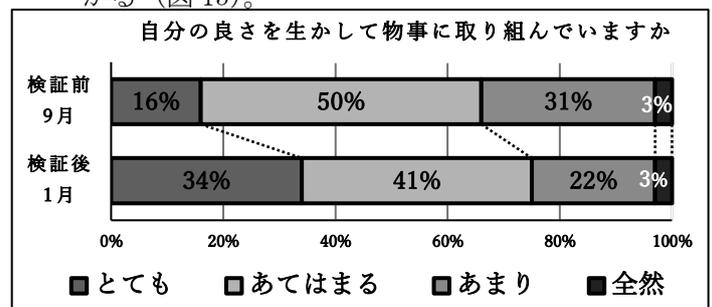


図15 自分の良さを生かすことに関する意識調査

③ 考察

【実践1】の一連の活動について自己評価を行った後、相互評価で原因と結果を結びつけ学習過程を振り返り、自分の頑張りや成長を実感するとともに、友達と達成感を味わったりしたことで、他者の役に立つことのできる存在であることを実感し、自己有用感が高まったと考えられる。

その後、学級活動(2)の「ジョハリの窓」の授業で自己理解を深め、総合的な学習の時間に職業調べや職業インタビューのまとめを行うことで職業観を広げ、【実践2】の授業で、今までに身につけた力を意識し、夢や目標を考え、実現に向けてすべきこと意思決定することで、将来に向かって自分らしい生き方を考え行動することにつながったと考える。

ジョハリの窓とは、自分が知っている「自分の特徴」、他人が知っている「自分の特徴」の一致・不一致を「窓のように見える4つの枠」に分類することで自己理解のズレに気づく、心理学で使われている手法であり、他人とのコミュニケーションを円滑にするためのものである。

【実践2】では、ほとんどの生徒が意思

決定できた。その一週間後（1/18）に行った振り返りでは「家族に話をし、高校などの進路を考え中」「将来しっかり仕事ができるように人の話をしっかり聞いている」「このままでは本当に行きたいところ行けないから1日1時間を目安に勉強している」「英語検定の資格を取るように勉強」など、行動や気持ちの変化を記述している。

意思決定した「挑戦していききたいこと」について、授業後の状況を調査したところ（1/18時点）以下の結果となった（図16）。

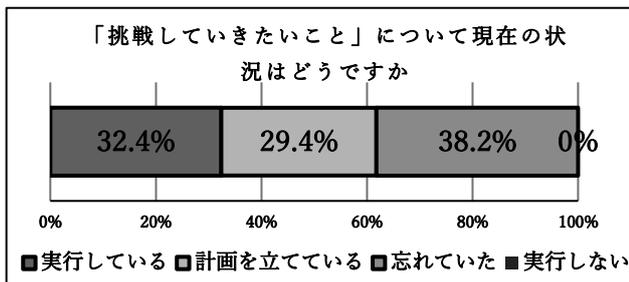


図16 意思決定した後の生徒の実践状況調査

意思決定したことを実行している、または計画を立てていると回答した生徒は全体の61.8%であり、38.2%の生徒が忘れていた。その原因として、意思決定したことを定期的に意識する手立てがなかったことや、具体的な意思決定が出来なかったり、意思決定したものが将来の夢や目標の実現に有効であることがあまり感じられないことが考えられる。普段から将来に必要性を感じる教科の授業や、職業に関する事前学習で、より質の高い授業を、今後実践していくことが大切である。

### 3 本研究を通して

本研究は、学級活動(1)と(3)を通して行ったものである。学級活動(1)で多様な他者と協働し、自己有用感を高め、学級活動(3)で自己のよさを生かして、自己実現できる生徒の育成を目指した。

研究をすすめていく中で、定期テストに向けて一生懸命勉強するようになった生徒がいたり、教師に高校についての質問をする生徒がでてきたりする等、夢や目標に向かって

努力している生徒が増えており、アンケートの結果からもそれを読み取ることができる（図17）。

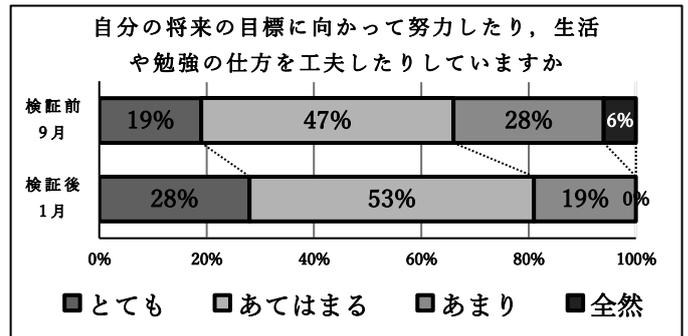


図17 「中学校キャリアの手引き(文科省)」のアンケートの一例の質問を使用

これは、多様な他者と協働し、自己有用感を実感することにより、自分に自信を持ち次なる課題に挑戦する意欲が高まったことによると考える。

また、総合的な学習の時間で行った職業に関する知識や情報を得る授業や職業観を広げる授業と学級活動を往還して学びをつなげたことにより、将来を見据え、学ぶことや働くことの意義を考えるようになったと考える（図18）。

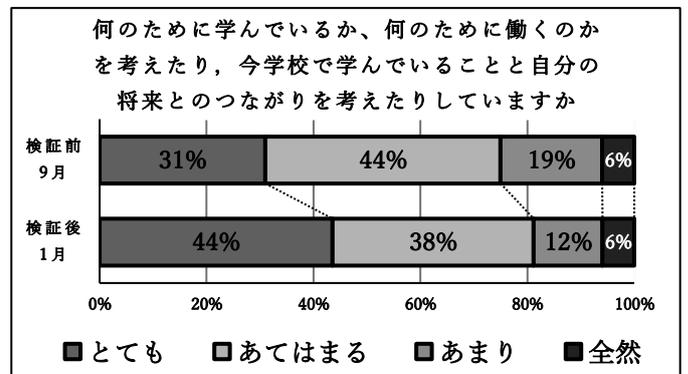


図18 「中学校キャリアの手引き(文科省)」のアンケートの一例の質問を使用

検証授業を行う前は、教師が指示したことをただこなす生徒が多かったが、楽しんで前向きに活動する生徒が増えた。これは、生徒が実践を通して、目的を意識し、どのような力が付くか、どのように将来につながるのかを考えながら取り組むようになったと考える。これらの検証結果を踏まえた上で、今後の授業においては、主体性をより高め自治的な活動から、自己のよさや可能性を実感し、自己実現を図る生徒の育成を目指す。

## IX 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 生徒自ら課題を見つけ、解決の実践を提案し、三つの視点を意識して、一連の活動に取り組むことで、目的や意義を意識した活動になった。
- (2) 相互評価で承認の場を設定することで、認め合いの雰囲気が高まった。また、他者の評価から客観的に自分を見つめ、自己理解が深まった。
- (3) 総合学習で得た知識を学級活動に生かす往還的な授業を行うことで、将来の見通しがより明確になり、自己のよさや可能性を生かして、将来の生き方を考え行動しようとする意欲が高まった。

### 2 課題

- (1) 合意形成を図るための手順や方法の指導と実践の積み重ね。
- (2) 意思決定したことを行動に移すきっかけと自己実現が継続する手立て。

おわりに

ここ数年生徒指導に関して、工夫、改善の必要性に迫られながらも、何をしてもうまくいかず、その場だけの指導で終わる日々を過ごしてきました。心から自己を省み、今度は前を向いて人に貢献するような、内面からの

指導がしたいと常に思っていました。日々充実し、安定した学校生活を過ごし、何か目標をもって、そこに突き進む生徒が少しでも増えればと思い研究所への入所を決意しました。

研究を進めていくうちに、学級会においてクラスのことを真剣に考え討議する姿や、仲良く協力して協働作業をする姿、完成させたときに仲間と喜ぶ姿、夢について語る姿が見られました。この成長していく生徒一人一人の姿を見られたのが、私にとって大きな喜びとなり、今後の教師としての大きな自信になりました。

今後はさらに研鑽を積み、互いのよさや可能性を発揮し、一人一人が活躍し自己実現できる学級活動の充実に努めます。

研修期間中、また、入所前研修から多くのご指導ご助言を頂きました浦添市教育研究所長濱京子所長をはじめ、研究所の職員の皆様、検討会や報告会等でご指導ご助言を頂きました浦添市教育委員会の諸先生方に深く感謝申し上げます。また、半年間の研究に快く送り出して下さいました相澤校長先生をはじめ港川中学校の職員の皆様、そして、第49期長期研究員としてともに励まし合い支え合った研究員に感謝申し上げます。

#### 【主な参考・引用文献】

- |   |              |
|---|--------------|
| ・『中学校学習指導要領解説 特別活動編』(2018)  | 文部科学省        |
| ・『中学校学習指導要領解説 総則編』(2018)  | 文部科学省        |
| ・『生徒指導提要』(2000)   | 文部科学省        |
| ・『生徒指導リーフ(leaf 6)特別活動と生徒指導』(2012)   | 国立教育政策研究所    |
| ・『生徒指導リーフ(leaf 18)「自尊感情」?それとも、「自己有用感」?』(2015)   | 国立教育政策研究所    |
| ・『学級・学校文化を創る特別活動【中学校編】』(2019)   | 国立教育政策研究所    |
| ・新・心理学事典(1988)『新・心理学事典』依田新 監修   | 金子書房         |
| ・稲垣孝章(2020)『特別活動で日本の教育が変わる!』著/杉田洋, 稲垣孝章   | 小学館          |
| ・川瀬八州夫(2002)『東京家政大学研究紀要』第42集(1), p. 53~62,  |              |
| ・『沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトII』(2020)   | 沖縄県教育委員会     |
| ・栃木県立総合教育センターの研究結果(2013)『高めよう 自己有用感』<br><a href="http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/">http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/</a>                 | 栃木県立総合教育センター |
| ・『自己有用感尺度(質問紙)と分析ツール』(2013)   | 栃木県立総合教育センター |
| <a href="https://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/data/h24_jikoyuyokan_03.pdf">https://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/data/h24_jikoyuyokan_03.pdf</a> |              |
| ・『積極的な生徒指導の在り方』(2007)   | 岩手県立総合教育センター |
| <a href="http://www1.iwate-ed.jp/kensyu/siryoku/h19/h19_125sts.pdf">http://www1.iwate-ed.jp/kensyu/siryoku/h19/h19_125sts.pdf</a>   |              |